

君子は器ならず

愛知教育大学
国語教育講座 准教授

鈴木 達明

漢字文化圏において最も多くの人に読まれてきた古典は『論語』であると言われる。短い対話篇を中心とした言行録で、どこからでも読み始められる文体は、その親しみやすさの理由の一つとなっている。一方で、思想書として読む時には、重要な概念でも出現箇所ごとに表現が異なり、それらをつなげる説明や普遍的な定義が示されないため、頭を悩ませられることが少なくない。これは『論語』の文体の副作用とされることもあるが、私には、それとは異なる、思想的に重要な意味があるように思われる。

その例として、「君子」ということばを取り上げたい。「君子は言に訥にして行に敏ならんと欲す」、「文質彬彬、然る後に君子なり」、「君子は義に喩り、小人は利に喩る」など、一万四千字弱の『論語』の中で百箇所以上に用いられ、「仁」と並んで最も重要な概念語であるといえる。それらの例を見比べれば、儒家的徳目と教養を身につけ、為政者としての資質があり、円満な人格を持つ、といったイメージが浮かび、理想的人物を指すことはわかるものの、各用例をまとめるような定義は示されない。

その用例の一つに、「君子は器ならず（君子不器）」という、「子曰く」の他はわずか四字の章がある（為政篇）。この「器」は、特定の用途に限定されたものと解釈される。日本語に訳すならば道具や器物となる。その上で、歴代の注釈の多くは、君子は特定の用途に止まらない

い万能性を有すると説明する。スペシャリストでなくゼネラリストということだろう。

だが果たしてそうなのだろうか。子罕篇では、「多能」であると褒められた孔子が、自分は若いころ身分が低く、それでつまらぬことに多能であったが、「君子は多ならんや、多ならざるなり」、君子は多能ではない、と述べる文がある。謙遜のことばではあるが、君子を単純に多才・多芸とできないことがわかる。

また公冶長篇には、弟子の子貢に対して、孔子が「女は器なり」といい、何の器かと聞かれ、宗廟の祭祀で供物を盛る「瑚璉」だと答える文がある。子貢は、弁説に優れ、外交官や商売人としても活躍したとされる、現実的な才能にあふれた弟子であった。ここはそんな子貢を、最上の「器」であると褒めたものと解釈するのが一般的である。

これらを見ると、「器」と「不器」との差違は、専門家か万能の才かというよりも、実用性があり外側から評価できる能力や技術か、それとも明確なたちで現れず能力や技術として把握しづらい才能か、という違いとして理解するべきではないかと思うのである。

そのような君子像を最もよく体現するのが、孔子最愛の弟子である顔回である。彼は、「一を聞いて以て十を知る」、門下きつての「学を好む」者、質素な生活でも自らの楽しみを変えないなど、ほとんど手放しで賞賛され、別格の

理想的人物とされる。しかしながら、「一日中話しても異論を唱えず愚かなように見えた」と言われるように、一見して才能が明らかでないのではなく、子路や子貢、宰我のように現実の政治に関わった記録も伝わっていない。

ところで、儒家と対立的な道家の書である『莊子』には、孔子や顔回が道家的な人物として登場する寓話が多く見える。興味深いことに、その場合、孔子が『論語』での人物像と大きく異なるのに対して、顔回の方は、貧困にいて憂いなく、静かで落ち着いたさまなど、『論語』でのイメージと不思議に似通う姿で現れる。このことから、『莊子』は顔回の学派を通じて儒家の影響を受けたとする研究者もいるほどである。実際には、孔子と同様、顔回もまた『莊子』の著者たちによって都合よく換骨奪胎されたキャラクターであるに違いないが、『論語』の顔回に強調される「器ならず」の君子像が、結果として道家思想と似通うイメージを持つことを示しているといえるだろう。

もちろん、儒家の「君子」が備える徳目は、『莊子』の思想とは全く異なるものであり、「器ならず」とはいつても、道家の「道」のように認識不能なものではない。孔子にとって君子は明白に把握できるものであった。ただそれは、一つの定義によって規定したり、必要十分な能力や才能をリストで示したりできるものではなく、個別の状況における行動や心のあり方を描

くこと、いわば外延的な説明によってのみ表現できるものとして認識されていたと思われるのである。『論語』の記述の仕方は、そのような認識を反映していると考えたい。

この君子の「器ならず」という性質は、現実社会にも影響を及ぼした。中国では、隋代から清代末期まで、「科挙」という官僚登用試験が行われた。それは儒教的な徳目を備えることで政治に参加する資格を有する人物、すなわち君子を選抜するものに他ならない。

その中心であった進士科の試験で問われたのは、時代による差違はあるが、主に儒教古典の知識と文学の能力であった。

科挙制度に対しては、その公正さが高く評価される一方、これらの試験科目については、現実的な政治家の能力とそぐわない評価基準であり、中国文明を停滞させる原因となったとして、批判的となることが多い。

ここで注意すべきは、当時の人々も、古典の知識や文学的な才能が現実の政治能力に直接役立つと考えていたわけではないということだ。君子は何より優れた人徳を持たねばならない。それを前提とした上で、多くの受験者に対し、公正な評価のできる指標として、これらの知識・才能がふさわしいとされたのである。

更にその評価基準と方法については、歴代の王朝を通じて何度も議論の的となってきた。公正さを保ちつつ人徳を測ることは、それだけ難

しいものであったといえる。

科挙での君子評価は、上述した『論語』の君子像そのままではないが、測りがたいものを公正に測るといふこの困難な試みが千三百年にわたって続けられたことは、君子における「器ならず」部分の重視が、深く浸透していたことを示すものではないだろうか。

近年の教育現場では、従来以上に客観性と可視性が重視されてきている。大学においても、評価と直結するように、授業の目的や到達目標などは、「〜ができる」など、観察可能な行動で記述することが求められている。

評価は、客観的かつ明示的な指標で計測できるものについてなされるべきであることは確かである。例えば人徳などをそのまま評価しようとすれば、容易に不正の温床となることは、科挙における議論からも明らかであり、その点において、評価基準に対する現在の方向性は正しい。

しかしそれを、評価できないものは目指すべきではないとまで広げるなら、それは行き過ぎだろう。個々の授業においては目に見える到達目標が必要であるにしても、総体として人が学ぶということとは、何が「できる」ことで終わるものではなく、それを通して何かに「なる」ことであるはずだ。評価の対象でないことは不要だと考えられがちだが、「できる」では記述できないものをも育むことを忘れてはなるまい。たとえ君子ではなくても、「器ならず」には意味がある。